
刹那

するめ315

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那

【Nコード】

N6567M

【作者名】

するめ315

【あらすじ】

愛するあの方のもとへ、嫁いであら3年の月日がたった。王妃としての責務も果たせず中途半端な私。王妃として認めてもらえていると感じることはできるのは、あの方の皇女を育てることを任されていることだけである。

。。

シリアスときどきコメディー

1（前書き）

こんにちは、はじめまして。

なにぶんはじめての投稿ですので、ただただお見苦しい点があるかと思いますが、生温かい目で見守ってやってください。

この小説で気分を害された方はすぐさま戻るボタンを押していただけるとさいわいです。

パンパン

城下で王と王妃の婚礼3周年を祝う式典が始まる。

今日でこの帝国に嫁いで3年の月日が流れた。

あの方は私をみてはいらっしやらない。この3年私があの方にお会いするのは政務にかかわる行事と月に3・4回訪れる義務のような夜伽だけ……。愛されたいなんて贅沢は思っではいけないことは嫁いで来た日にわかっていた。

だってあの人には愛する人との間にかわいらしい姫がいるのだから。

姫の母、ご側室様がすでに亡くなっていらっしやっても姫を可愛がる姿からは、まだ愛していることが感じ取れるのだから。

ただ、好きでいるのは……愛することだけは許してほしい。この気持ち伝えて重荷になるようなことはない、嫁いで来たときに誓った。そして、せめて、あの方のために微々たるものでもいい、力になれるなら、あの方が求める王妃になろうと決めた。

式典の度私はこの誓いを新たに胸に刻む。

式典の度に私は顔を覆うベールに感謝する。

誓いを立てている時の顔はけして、民に見せる類のものではない。何より、隣に座るあの方、皇帝オルデロール・マクシオンⅡマクセウスが不信に思われるにきまっている。そのぐらいあの方は敏い。

「……な。」

「おい。雪那^{せつな}。雪那・ベリアス・菜穂^{なほ}。マクセウス。」

「は……はい。いかがでした。陛下。」

「いかがしたではない。そろそろ式典の終盤だぞ。席を立ち国民に挨拶せねばならぬ。そのあとにはパレードもだ。呆けている時間などないぞ。」

「も……申し訳ございません。」

「謝るくらいならはじめからするな。」

せっかく誓いを新たにしたのに、王妃としてそぐわない行動を早速してしまったようだ。いつもこうなのだ、しようとするすべてがあだとなる。立派な王妃など夢のまた夢。これでは、陛下に愛されるはずもない……。

パタパタ

幼子の足音が聞こえる。

「おとうさま。おかあさま。ナーナもいつしょにいいですか。」

幼子特有の舌つ足らずなかわいらしい声が私たちに向けられた。

「もちろんだとも。ナーナもこの国の王族ならば国民のことを知っておかねば。」

陛下は幼いナーナ姫を抱き上げ微笑みながら言った。

「はい。おとうさま。おかあさまもいいですか。」

「ええ。もちろん。それに、お父様がお決めになられたことですもの。私には、反論などあるはずもございませんよ。」

ナーナ・トメイス「マクセウス姫……。ただこの子に母と呼ばれるだけで、陛下がその呼び方を許していることだけで、姫の教育の一端を担わせてもらえるだけで、私は少しばかりではあっても、認めてもらえているのだと感ずることができている。

ただしこれは本当に少し、微々たるものである。

なぜなら私は王妃としての最大の責務である皇子の出産　いえ、この3年妊娠すらできていないのだから……。

1（後書き）

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

2 (前書き)

なんか長い……。

広場に面したバルコニーに出るために王宮内を移動中、私は一步引いたところで仲の良い親子の背中を追っている。私もその中に入りたいのに……私と親子との間には見えない壁を感じてしまう。

血の繋がりだろうか。あのお方からの愛が得られていないせいだろうか。

姫には、うぬぼれではなく好かれていると、感じる事ができているのに……あの中に私は入ることができない。私が子を産むことができるだろうか。

しかし、私は子を産むことなどできない。

「おかあさま。」

いつの間にか陛下に抱き上げられていた姫が私のドレスのスカートを引っ張っている。

「え……なあに。」

「おかあさま、だいじょうぶう。ばるこにーにつきましたよ。」

考えに浸っているうちに、バルコニーに出るための扉の前についていらしい。

「ええ、大丈夫よ。心配してくれてありがとう、ナーナ姫。」

姫の頭をなでながら私は感謝をのべた。

「雪那いかがした。呆けている時間が多いぞ。今日という日に使い物にならないのでは困るな。帝国の王妃としての役目を忘れるな。」
「も……申し訳ございません。」

またしても誓いを破ってしまった。本当に私は役に立たない王妃だ。

「おとうさま、おかあさまをいじめてはダメです。」

小さな体が両手を広げ私を背中にかばった。

陛下は呆然と姫を見ていらした。

こんなことではダメなのに、それだけで涙が出そうになった。そしてまた私は、顔を隠すベールに感謝した。

「ナーナ姫、お父様は怒ったわけではないのですよ。国を護るものとしての役目をお母様に教えてくださったのです。」

「ほんとうですか。」

「ええ、もちろん。お母様がナーナ姫に嘘をついたことがありましたか。」

「……ないです。」

「では、お父様に悪いことをしてしまいましたね。謝りましょう、ナーナ姫。誤解させてしまったのは、お母様も原因ですからお母様といっしょに謝りましょうね。」

「おとうさま……ごめんなさい……。」

「陛下、申し訳ございません。」

「よい。ナーナの正義感で国を護る王族として、必要なものだ。はなから怒ってなどいない。」

「広いお心に感謝いたします。陛下」

こんな時私は、ナーナ姫に対する深い愛情を感じる。仲の良い親子を見ることはうれしくもあるが、寂しくもある。

その中に私は入ることができないから。

「お取り込み中悪いけど、そろそろ国民に顔を見せていただけないかしら。」

「オリビア。」

「宰相殿。申し訳ございません。私が少しボーっとしてしまって、ナーナ姫と陛下を心配させてしまったのです。」

「いいえ。いいんですよ、王妃様。どこその馬鹿が毒を吐いていただけだとわかっていますから。」

「どこその馬鹿とは余のことではないだろうな。」

「一言もそんなことは言っていないませんよ、陛下。そもそも、賢帝とたたえられている陛下を馬鹿などと、言うはずがございません。」

「……もうよい。いくぞ。」

陛下は扉を開け放ち行ってしまうれた。

「あーあ、ふてくされてやんの。」

「何かおっしゃいましたか、宰相殿。」

「いいえ。王妃様も皇女様もお早くどうぞ。」

「ありがとうございます。行ってまいりますね。行きましょう、ナーナ姫。」

「はい。」

オリビア・テローム。帝国マクセウスの宰相、女性である。侯爵家の出身で、3人の子持ちの母でもある。彼女の女性視点からの政治は帝国に大きな影響を与え、より発展した国へと導いた。

宰相、オリビア殿を見てもわかるように、この国では、男尊女卑の意識が低い。

女性でも王位継承権がある。皇子のほうが継承権において優先ではあるが、そして、手続きが面倒ではあるが、できるのだ。

陛下が愛した人との子
だ。

ナリーナ姫に国を継がせることができるの

2（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

今日3度目のベールへ感謝を抱きながら、別のことを考えていた。国民に手を振りながら考えているのは、ナーナ姫に王位継承をさせる方法だった。

陛下は今現在、妃も側室も持たれてはいらっしゃらない。

しかし、私が嫁いで今日で3年たつのだ。

そろそろ貴族や大臣、果ては他国から、妃を持つべきだという声があがってもおかしくはない。

陛下が決められたことに、否をとねえることは誰にもできない。

今までは私だけだった。

私が妊娠をしないように、細心の注意を払えばよかった。

しかし、他の妃を持ったらそうはいかない。

妃が産むのが皇女ならいい。皇女なら第一子のナーナ姫に王位継承権がある。

でも、皇子なら……王位継承権は皇子にいつてしまう。

それでは、この3年間の苦勞が水の泡になってしまう。

私の苦勞、それは 避妊薬を飲み続けること。

この3年間誰にもわからないように、毎日飲み続けてきた。

ナーナ姫にも、侍女にも、大臣の方々にも、もちろん陛下にも。

私が生まれた国は、帝国よりもずっと東に位置している。国では、医学や薬学などに関することが発達していた。

また、王族は医学や薬学を学ぶ決まりがある。本来は、私欲に使うために学ぶのではない。戦や天災で傷ついた民を助けるために学ぶのだ。

私欲のために使うことを許してほしい。いや、これは私欲などではない。

ナーナ姫果ては陛下のため。

陛下も感じているはずだ。愛してもいない女との間に生まれた皇子に国を継がせるよりも、今も愛し続けている、女性との間に生まれた皇女に、国を継がせたいと。

そしてそれが、王妃として私にできるあの方への贈り物。

思考に浸っていたその時、視界の隅に一瞬光るものが見えた。広場に集まっている民の装飾品の類だろうか。気になって目を向けた。

考えるよりも先に体が動いた。

いつの間にかナーナ姫を抱き上げていた陛下を突き飛ばし、ナーナ姫を胸にかばった。

ドス

キヤー

背中が刺さる衝撃を感じた。瞬間、民たちの悲鳴が聞こえる。背中が熱い。燃えているようだ。

「……お……おかあさま……。」

「……なんですか、ナーナ姫……危ないですから……お父様や近衛兵といっしょに、王宮の中に入りましょう。近衛兵の方々、しっかりしてください。陛下と皇女を王宮内へ。」

「か……かしこまりました。陛下、皇女様こちらへ。」

「王妃様もお早く宮殿内へ。」

「い……いえ。すみませんが肩を……かしていただけますか。」

近衛兵の肩をかり、私は再びバルコニーに立った。

「……国民の皆さん、ご心配をおかけしました。私は大丈夫ですから……皆さんもお早く非難をなさってください。ここは危険かもしれません……。」

「王妃様お早く。」

「はい。では、皆さん本当に迷惑をおかけしました。」

ボタン

扉から中に入り扉が閉まった瞬間、視界が暗くなり倒れた。

「王妃様。王妃様。早く医師をお連れしろ。」

「おかあさまー。」

ナーナ姫の泣き声や周りの声を遠くに聞きながら、私は意識を失った。

3（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次回は皇帝陛下、オルデロール・マクシオンⅡマクセス視点いきた
いと思っています。

矢じりに毒がつけられていたらしい。

毒のせいで熱に侵され、苦痛にゆがむ妻、雪那の顔を見ながら、あの時を後悔していた。

ナーナを抱き上げ、顔に笑顔を貼り付け、民に手を振りながらも、全神経は隣にたたずむ雪那に向いていた。

雪那が今日は何か真剣に考えていたことは知っている。悩みがあるなら打ち明けてくれたらいい。たちどころにその不安を、解決して見せる自信が俺にはある。

しかし、雪那は言わない。それは、結婚当初からかわらないことだ。初めのうちは、夫婦としての信頼関係が、未熟だからだと考えていた。

だが、今は、何が原因なのか俺には、計り知れない。

無理に言わせても意味はないだろう。

子ができたら、解決すると思っていたが、雪那にはいまだ妊娠の兆しはない。

隣で急に動く気配がした。顔を向けようとした瞬間突き飛ばされた。

ドン

ドス

キヤー

民たちの悲鳴が聞こえる。しばらく何が起こったのかわからなかつ

た。

ただわかるのは、突き飛ばされた衝撃で、手を離してしまったナーナを、雪那がかばい抱いていることだけ……。

「……お……おかあさま……。」

「……なんですか、ナーナ姫……。」

『なんですか』ではないだろう。背中矢が刺さっているんだぞ……。

「危ないですから……お父様や近衛兵といっしょに、王宮の中に入りましょう。近衛兵の方々、しっかりしてください。陛下と皇女を王宮内へ。」

な……何を雪那はいつてるんだ。なぜ雪那自身の名が非難するほうに入っていない……。

「か……かしこまりました。陛下、皇女様こちらへ。」

「王妃様もお早く宮殿内へ。」

「い……いえ。すみませんが肩を……かしていただけますか。」

何をする気なのだ、危険なのに。

思っただけでも言葉など、一言も発することができなかった。

近衛兵に周りを固め護られ、バルコニーから扉までの短い距離を押しされるように移動した。

ボタン

扉の向こうで雪那の声が聞こえたような気がした。

ボタン

扉の閉まる音で目が覚めた気がした。

いつの間にかオリビアが医務室に入ってきていたらしい。

あれから3日たった。

あの後雪那は、いきつく暇も無しに担架にのせられ、医師に連れられ医務室につれていかれた……。

雪那がどうあっても俺は王なのだ、呆けている場合ではない。

「少しお休みになられてはいかがですか、陛下。」

「余は大事な。現状の把握はできているか。」

「そんなに次々聞かれても……。」

「それが宰相の仕事だろう。」

「ハイハイ。矢をいった犯人は失敗後自害した模様。報告では、広場に集まった国民に被害は出ていません。」

「そうか。ナーナは。」

「ナーナ皇女は、王妃様が倒れたとき泣き叫びましたが、そのまま泣きつかれるように気絶して、侍女と近衛に連れられ、部屋に戻りました。その後は部屋でおとなしく、放心しているとの報告です。」

「そうか。」

「やはり、今回民に被害が出なかったのは、王妃のおかげですね。」

「なに……。」

「覚えていらつしやらないんですか。王妃様が体をおして、民に話しかけ混乱を未然に防いでくれたんです。」

「そう……だったのか……。」

雪那の手を握り祈る。早く目を覚ませ。言いたいことがたくさんあるんだ。

お前があの時何を考えていたか教えてくれ。

ピク

握っていた手が動いた気がした。

「雪……那……。」

雪那がゆっくりと目を開けた。

4（後書き）

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

5 (前書き)

今回少し長めです。

その上、R15っぽい表現を含みます。

ご不快に感じる方は、読まないことをお勧めします。

夢を見た。

ずっと一人でいたのに、いつの間にか誰かに手をひかれながら歩く夢。

握られている手がとても温かくて、さびしいと思っていたことなんて忘れてしまった。

「雪……那……。」

ぼやけた視界、ぼんやりとした頭、けれど、名を呼ばれたほうに無意識に顔を向けた。

徐々に視界が開けていき、声をかけている人物が誰だかわかった。

「陛……下……。」

「雪那。良かった。3日間眠り続けていたのだぞ、大丈夫か。どこか痛みを感じるところはあるか。」

「いえ……大丈夫です。ここは……。」

「医務室だ。目が覚めたなら部屋に戻るように手配する。」

「はい。ありがとうございます。」

ぼんやりとした思考回路で会話をしていた。

なぜ私は、医務室になどいるのだろう……。

ハッと気がついた。

ぼんやりとしていた思考回路が一気に動き出す。

「陛下。お怪我はありませんか。ナーナ姫は無事ですか。怪我は。」

息継ぎも無しに一気にまくしたてた。

陛下とナーナ姫にもしものことがあったら　。

「王妃様、落ち着いてください。」

「宰相殿……。」

声をかけられるまで、宰相オリビア殿が医務室にいるなんて気付かなかった。

「皇女様はご無事です。怪我１つありません。ただ　」

ナーナ姫に何かあったのだろうか。怪我はないとおっしゃっていたのに……。

「ただ　王妃様がお怪我をなされ、お目ざめにならないことにショックを受けていらっやいます。侍女の話では、ここ３日は放心状態だそうです。」

早くナーナ姫にあつて不安を解消してあげなくてわ。トラウマになつてしまう。

何より私が、この目で姫の無事を確認したい。

「その唐変木……アッ違った。皇帝陛下も怪我なく、無事ですよ。王妃様のおかげです。」

……聞いてはいけない言葉が聞こえた気がした。しかも、そのまま流されてしまった。

「王妃様は、今しばらくお休みください。まだ、熱があるのですか

ら。私は大臣や皇女様に、王妃様がお目覚めになられたことを、報告してまいります。」

「わかりました。お願いいたします。」

「お体に無理をなさらない程度でよいのですが、その唐変ほ……皇帝陛下のお話を聞いて差し上げてください。では、失礼いたします。」

ボタン

オリビア殿が部屋から出ていくと、沈黙が流れた。

「……。」

「……。」

「……。」

「……あの……陛下、宰相殿がおっしゃっていたお話とは……。」

沈黙に耐えられず、先に口を開いたのは私だった。

「……………」

陛下からの返事はない。

私が寝込んでいる間に何か問題でもあったのだろうか。思考をめぐらせている間に視界の端で、陛下が動いた。

ギシ

ベッドがきしみ、陛下が私が寝ているベッドに座った。

手が伸び、私の頬に陛下が触れた。まるで、何かを確認しているよう。

この体温、私知ってる。さっきの夢の温かさと同じ。

ギシ

ハッと息をのんだ。

思考に浸っていた間に、鼻先が触れ合うほど近くに陛下がいた。動いたのは陛下だった。

「雪那。雪那。雪那。。」

幾度となく名を呼ばれ、口づけをされた。徐々に口づけが深くなっていった。

ぴちゃ、くちちゃ

卑猥な音で耳が犯されていく。

「ん……ん……はあ……」

思考が跡形もなく溶けてた。

しかし、陛下が覆いかぶさり、胸をもまれた瞬間、思考が戻った。

私は今日、避妊薬を飲んでいない。

普段であれば1日くらい大丈夫だが、3日寝ていたなら、その期間飲んでいないことになる。

ダメだ。

ドン

思わず陛下を突き飛ばした。

「……なぜ、いつも俺を拒絶するんだ！……！」

陛下の顔が一瞬悲しそうにゆがんだ。しかし、すぐに怒りの色に塗り替えられた。

怒りに身を任せるように、陛下は襲いかかってきた。

「やめて、やめてください。お願い。ヤダァ……やめてえ……おねがい。」

どんなに抵抗しても所詮怪我人の体力では、逞しい成人男性の体をもつ陛下にかなうはずもない。

その上、徐々に、身体が快楽という名の甘い熱に溶けていく。

ヤメテ……お願い……妊娠ダケハシタクナイノ……。

愛サレナイト知ッテイルカラ。

5（後書き）

次回は、陛下視点です。

襲い掛かった理由とか書けるように頑張ります。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

6 (前書き)

今回短めです。

ボタン

行為が終わり、気絶するように意識を失った雪那を、丁重にベットに寝かせ医務室を出た。

「あんた何やってんの。自分が何したかわかってんの。」
「……。」

扉の横にはオリビアが腕を組んで立っていた。
話からすると何があったかわかっているらしい。

「家臣じゃなく、友人として忠告するわ。よく聞きなさい。」
「……。」

「王妃様は目覚めたばかりで、まだ体調が万全じゃないのよ、無理をさせて悪化させたらどうするの。責任もとれない癖に、馬鹿なことをしてるんじゃないわ。それに、私は、話をしなさいって言ったのよ。それがどういことなの。説明しなさい。」

オリビアの言葉が、胸に響いた。

あまりに正論すぎて、何も言えなくなった。

そして俺は、逃げるようにその場に背を向けた。

「ちょっと、逃げるんじゃない。」

後ろでオリビアが騒いでいるが、聞こえないフリをした。

ボタン

自室に戻ってきて改めて後悔が胸をしめる。
なぜ、あんなことをしてしまったのだろう。

頭では、雪那の体調が万全ではないことも、自分が雪那に無理を強
いていることも分かっていた。

だけど……止められなかった。

突き飛ばされ、拒絶の言葉を雪那の口から聞いた瞬間、頭の中で何
かが切れ、カッとなった。

俺はただ……ただ…雪那の無事を肌感じたかったただけなのに、拒絶
された。

そのあとはもう、今までたまっていた雪那への伝わらない思いに押
しつぶされてしまった。

気付いた時にはもう、すべてが終わっていた。

引きちぎられたように脱がされている雪那の夜着。

乱れたシート。

身体を濡らす汗と吐きだした欲。

気絶した雪那の頬に伝う涙。

もう、すべてが遅かった。弁解などする余地もなかった。

怒りに任せた後に襲ってきたのは、言いようもない後悔の念。

こんなことがしたかったんじゃない。こんなことのために雪那をもらったのではない。3年も仮面夫婦のような生活をしたのではない。

雪那に愛され、家族3人ごく普通の生活がしたかっただけなのに……。

後悔を今頃いくらしても遅いことはわかっているが、せすにはいられない。

一体俺はどこで道を間違えたのだろう……。

そして俺は、余りある後悔の中、一つの決意を新たにする。

雪那に近づかない。

せめて、雪那の体調が万全になるまでは、雪那に近づき、触れるのはよそう。

雪那だってあんなことをされた後に、触れられたくないだろうから。。

意識がないはずなのに、涙を流す顔など見たくないから。

しばらく、もしかしたら永遠になるかも知れないが、近づくのはやめよう。

遠くからでも君を見ることができたなら、きっと俺は幸せになれるはずだから。。

6（後書き）

こんなヘタレ陛下を好きになってくれる方は居るんでしょうか…。

今回は、予定通り宰相オリビア・テローム視点で、過去編に行きたいです。

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

7 (前書き)

セリフ一切なし、語りはオリビア。

過去編前篇です。

読みにくいとは思いますが、頑張ってください。
疲れちゃったら、回れ右、してくださいね。

逃げるように去って行った背中を見送りながら、考えるのは弟のよう
に可愛がってきた皇帝陛下、オルデロール・マクシミリオン＝マ
クセスのこと。

あの子は不器用なのだ、先の両陛下はオルのことを、息子としてよ
りも、跡継ぎとして厳しく育てた。そのため、愛情の伝え方を知ら
ないのだ。

ツギイ

医務室の扉を薄く開ける。

ベットに優しく寝かされている王妃には、得も言われぬあの子の愛
情を感じる。同時にあの子の不器用さにため息が出る。

あの子は気付いていないのだ。王妃に愛が伝わっていないことに、
王妃が誤解していることに。

それもこれも同情なんかで側室を娶った結果なのだ、反省するとい
い。

7年と少し前、帝国マクセウスで一つの事件が起きた。

古株の貴族が不正を犯していることがわかった。先帝の時代から、
国庫を横領されていたのだ。

その貴族、セナン・ハ ネット公爵は、大臣として先帝の信頼が厚
く、当時王位を継承してから3年、ひよっこのオルをよく助けてい

た。

とても、横領を働くような人には見えなかった。

公爵家には、重い病の妻、ご息子が2人、ご息女が1人いた。そしてこのご息女、アメリカ・ハ ネットこそが今は亡きご側室であられる。

アメリカは幼きころから王妃候補最有力として、私とともに、王宮に部屋を与えられ生活していた。

私はその時王宮で、今の旦那を捕まえ、王妃候補も辞退した。

王妃として立つのは、アメリカであるとほぼ決まった時の、不正発覚であった。

公爵は、病の妻の薬のために横領をしていたことが分かった。公爵夫人の病のための薬は、遠く、東の国、穂澄^{ほすみ}国からの輸入品で、とても貴重なものであった。

昔なじみであるアメリカを、父親の横領、しかも、同情の余地の持てるもので、国外追放にするのはかわいそうだ。

当時、正室も、側室もいなかったオルはそう考え、側室に迎えたのだ。

これこそが、1番の同情であることに気づかずに……。

アメリカを側室に迎えたことで、公爵一家は国外追放は免れたが、爵位の剥奪、領地の没収、王都を永久に追放された。

アメリカの母の薬は、アメリカがオルに頼み込み、自身の宝石や、ドレスの代わりにもらっていた。

しかし、不正の発覚が、心労として身体に祟ったのであろう。発覚からわずか2カ月で儚くなった。

アメリカは他に妃がいなかったことが幸いしたのであるう、元公爵令嬢であるという立場ではあったが、やっかまれることなく、父親のスキヤンダルと母の死の傷を、静かに癒していった。

アメリカは決していやな奴ではない。厳しくしつけられていたために、静かで、頭の回転が速く、分をわきまえていた。

不正発覚から1年が過ぎたころ、アメリカが懐妊したことが分かった。

その間アメリカは、『側室だから』といい、表舞台に立つことは一切せず、ひっそりと後宮で生きていた。その行為が、大臣たちから好感が持たれはじめていた。

オルとアメリカはひっそりと愛をはぐくんだのだろう。それが、恋でなく、家族愛でも、同情よりはマシだと私は思った。

それからまた1年近く経ち、王位継承権第1位の子が生まれた。皇女、ナーナ・トメイス・マクセウスである。

オルは相変わらず、アメリカ以外の妃を持っていなかった。皇女がもし、皇子であったならば、アメリカは空席の王妃の座に国母として、座することも可能であったであろう。

それはかなわなかったが、大臣たちやアメリカ本人であさえ、今後に期待というふうになっていた。

一生叶わぬ希とは知らずに　。

ナーナ皇女が生まれ1年の月日がたった。

アマリアに懐妊の兆しはないが、夫婦仲は良好で、時間の問題とみられていた。

オルもこのころには、穏やかなで静かな幸せを愛だと感じていたの
であろつ。

実際、アメリカやナーナ皇女を慈しんでいる姿をよく見かけた。

そう、雪那姫に会い、真実の愛を知るまでは。

7（後書き）

次はついに、陛下と雪那の出会い。
次で過去編終わるといいな。

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

8（前書き）

過去編中篇になってしまった。

短いです。そして今回も読みにくいです。本当にすみません。

出会うべくしてであった二人。

二人が出会うことは、思えば運命だったのかもしれない。

ハーネット元公爵一家の一件から、オルは国の医療発達に力を入っていた。

当時、マクセス帝国は医薬品のすべてを輸入品に頼っていた。

貿易相手は、隣国セレナーデ国を仲介にはさんで、遠く東の国

穂澄国。

帝国マクセスが存在する大陸、アルドトスにおいて、穂澄国からの輸入品の他国への分配、価格はすべてセレナーデ国が決定し、大きな利益を上げていた。

それは、逆に言えば、マクセス帝国は多くの金をセレナーデ国に払い、少量の薬剤を買わざるおえない状況だった。

医療にさける国の予算は決まっており、そのほとんどが、穂澄国の薬剤を買うのに消えていた。そのため、自国内での医療技術の発達はもちろん、治療法の発達などあるはずもなかった。

オルは、穂澄国とのマクセス帝国の直接貿易にて、薬剤はもちろんのこと、知識、技術を輸入しようと考え、目標としていた。

その足がかりに、隣国セレナーデで行われる建国記念パーティーを利用することを考えた。

穂澄国とセレナーデ国は、多国間貿易におけるパートナー。建国記念のパーティーならば、来賓として、国の重鎮を招いていると考えての行動だった。

アメリアの扱いは、帝国内では正室のそれと変わりなかったが、隣国のパーティーの同伴として伴うのは無理があった。また、幼いナ姫のことも考え、アメリアとナーナ姫を帝国においていくことに決めた。

はたして、この選択が正しかったのか。今でも私にはわからない。

けれど私は、忘れることは、ないだろう。

オルが、本当の愛を知った瞬間を、アメリアがいなくてよかったと感じたことを、普段のオルが、向けたことのない眼差しを、アメリアに見せなくてよかったと感じを……きつと忘れはしないだろう……。

もし、アメリアがいたならば、聡いあの子は気づいてしまう。

オルが、自身の過ちを理解したことに、今まで、アメリアに感じていた思いは、同情にしか過ぎないのだと言うことに……きつとあの子は気づいていた。

長い月日を過ごし、すべてが、すべて同情だったとはいえないと、私は感じているが、オルは未だにそうだとは思っていない。

だからこそ、罪の意識にさいなまれている。

いつそアメリカがその場にいて、気づいていたらあんなことにはならなかったかもしれない。

けれど、オルは……。オルデロール・マクシオンⅡマクセスは、建国記念パーティーの会場で、運命に出会ったことへの後悔はしていないだろう。

運命……。それは、当時はまだ、穂澄国第1皇女であらせられた、雪那王妃様に一瞬で目を奪われたことだった。

8（後書き）

ここまで付き合ってくださいありがとうございます。

次こそは過去編完結を目指して行きます。

今後とも刹那をよろしくお願いいたします

9（前書き）

長らくお待たせしました。

ついに過去編完結です。

しかし、自分の中ではあんまり納得がいていないので、今後とも検討していくつもりです。

パリーン

運命のあの日、当時唯一の側室であつたアメリアの部屋で、一つのものが壊れた。

華奢でかわいらしいガラスでできた白鳥の置物　　。

アメリアにとって愛する人……オルデロール・マクシオンⅡマクセスから生涯唯一、手ずから選び、渡された送り物であつた　　。

オルは、パーティーの最中ずっと、本来の目的を忘れたかのように、熱心に雪那姫に視線を送り、視線に気づいてもらえると、今度は幾度もダンスに誘つた。

その夜は、数回のダンスと少し長めの会話をし、姫が本来目的であつた、穂澄国の皇女だと知ると、オルは笑みを深くし、そのまま雪那姫と別れた。

この時、オルの中では雪那姫を、王妃としてもらうことが決定していたのであろう。

セレナーデから帰ってきたオルは、ある意味常軌を逸していた。それを、あの子は……アメリアは、本能で感じていたかもしれない。アメリアの不安そうな顔が、これからのことを暗示しているようだった。

それから長いようで短い一月という月日が流れた。
ある日、アメリカは聞いてしまったのだ、オルが王妃を持つと
していることを……。

オル自身から聞いていたら、事態は深刻にはならなかったかもしれ
ない……。
きっとあの子も受け止めることができた。あの子は強い子だったか
ら……。

しかし、あの子は聞いてしまったのだ、侍女たちの噂を、オルが熱
心に求婚している姫がいるということ。
。

事実はある子に『愛されていなかった』という絶望を運んだ。
両親のこと以来、あの子の心の支えは、ナーナ姫とオルからの愛だ
ったのだから……。

その日を境に、少しずつ、少しずつ、アメリカはおかしくなってい
ったのだろう。

この時、オルが何かすればよかったと思う。
オルがしなくても、せめて私だけでも何かしてあげていたら……。

私達は目先のことにとらわれすぎていて、周りの……アメリカの変
化になど気付きもしなかったのだ……。

私は、弟のような存在であるオルの希を叶えてあげたかった。

オルは、雪那姫を見てからというものの、雪那姫をなんとか自身に嫁
がせようと四方八方に手を回していた。
或る時は、穂澄国へ書を送り続け、時に、圧力をかけることもいと

わず。

また或る時は、大臣たちにも雪那姫との婚姻を認めさせるため、帝国に与える利益を説き、時には脅しともとれるような発言で、大臣たちに婚姻を認めさせたのである。

そして、時は瞬く間に過ぎていった。

オルの努力のたまものか、出会いからわずか3カ月で、半ば奪うような形をとりながらも、雪那姫との婚姻が、両国の間で決まったのである。

しかし、婚姻の決定は、オルの話を待ち続けたアメリカを、ますますおかしくさせた。

このころになって、ようやくアメリカの侍女があの子の変化に気がついた。

アメリカが、ナーナ姫を皇子扱いするといふのだ。

オルと私は、急ぎアメリカのもとに行き、事態の重さに愕然とした。

オルに気付いたアメリカは、駆け寄り、ナーナ姫を見ながら美しい笑顔で言ふのだ。

「陛下と私の皇子みこですわ。これで、晴れて私も王妃という立場になれますわ。」

気付いた時にはどうにもならないほどに、アメリカは壊れてしまっていた。

王妃という、オルにもっとも愛されるであろう立場への執着は、恐ろしいほどであった。

今まで気付かれなかったのは、ひとえに、元公爵令嬢としてのアメリカの振る舞いと、プライド故だったのであろう。

王宮医師の判断のもと、アメリカを離宮に移し隔離しようという話がでた。

しかし、これに反対する者がいた。

皇帝陛下オルデロール・マクシオンⅡマクセスその人であった。

オルは、アメリカについて深い罪悪感と、責任を感じていた。

『自分さえ勝手なことをしなければ……。』という思いがあったのであろう。

それに、幼いナーナ姫には母が必要だとも感じていた。

『自身の行いのせいで、ナーナから母を奪うわけにはいかない。』
そんな決意もあったのだらう。

アメリカの生活は、周りがサポートをし、ナーナ姫とは距離をおかせ、会わせる際は監視付き、という形をとり王宮内に残すこととなった。

しかし、壊れたアメリカには、周りのサポートも、気遣いも、無意味だったというしかない。

アメリカは、徐々に食事をとらなくなり、少しづつ衰弱していった。

オルの婚姻が決定してからわずか7カ月という月日でアメリカは、
儚く逝った。

しかし、国民はこの悲劇を知ることはない。側室の死など、伝えら

れることではないから。

アメリアの死からわずか2カ月後、王宮内に大きな傷を残したまま、オルと雪那姫の結婚式典が開催されたのである。

9（後書き）

ここまで読んでくださった方、お疲れ様でした。 and ありがとうございます。

楽しんでいただけたら幸いです。

このお話は、過去編の終了を物語の折り返し地点として予定していますので、今後は、完結に向けて頑張っていきたいです。

次回は、雪那王妃視点（？）の予定です。

10（前書き）

長らくお待たせいたしました。
何とか年内にU pできてよかったです。

医務室での出来事から3月という月日がたった。

その間一度も、陛下の訪れはなかった。

初めの1月は、毒の向けきらない私の身体を心配してくれて訪れないのだと……。

2月目は政務に戻った私が慣れるまで待っていてくれているだと……
…自分に言い訳をした。

3月目は……言い訳するのをやめた。

考えてみれば、陛下が訪れないのはもったもな話だ。

愛してもいない王妃に……情けをかけてやっているお飾りの王妃に、拒否されたのだから。

理由があつたしろ、あんな対応では、陛下が虚仮にされたと感じてもおかしくない。

私は捨てられたのだ。

愛する人に、愛している人に、自分勝手な理由で拒絶し……。

なんて滑稽な話だろう。まるで道化の様。

愛しているがゆえに、愛されたいがゆえに行ってきた行為のために、情けすら失うだなんて……………。

幸せな思い出だけを胸に、私の存在の一切が消えてしまえばいい。そうしたら、陛下の手を煩わせることがなくなるのに……。

そんな思いをかかえながらも、出会ったことに、仮面夫婦であろうと、陛下と結婚できたことに後悔だけはしていなかった。

私は、婚礼の式典のわずか1日前にマクセス帝国入りを果たした。

正直、マクセス帝国からの婚礼の申し込みは驚いた。しかし、純粋に嬉しかった。あの方の元に嫁ぐことができるなんて、言い表すことのできない幸せだった。

けれど、そのときから感じていた。僅かにはあるが王宮内の空気の重たさを、勤めているものの暗い表情を、ほんのわずかではあるが感じていたのだ。

そんな空気の中でも……いや、そんな空気を感じさせないのかごとく、婚礼の儀は華やかに執り行われた。

私が王宮内の空気の正体を知ったのは、婚礼から1月以上たったときであった。

王宮内の探検もかね、侍女がいないうちに庭園内の散歩に出かけた私は、噂話を耳にした。

内容は、当時1歳を過ぎた王位継承権第1位を持った皇女の、ナーナ姫の話であった。

「アメリカ様が亡くなって、今は誰が皇女様の面倒を見ているんだ。」

「宰相様の指示の元、乳母や侍女が交替で見ているらしいぞ。」

「そうなのか……。皇女様もお可哀想に……わずか1歳で母親をなくしたのだから……。」

「そうだな……。王妃様が皇女様を受け入れてくれるとよいのだが、未だに会っていないようだ。」

「……そうか……。」

「まあ、王妃様も戸惑っているのである。まだお若いのに、急に子供ができるなんて、誰だって悩むさ。」

「……それもそうだな。」

「それに、王妃様は国もとでかなりの人格者だったと聞いたぞ。きっと皇女様の母になってくれるさ。」

物陰でこの話を聞いて愕然とした。

私は、陛下に皇女^{おこ}がいらつしやることを聞いていなかった。知らなかったのだ。

気がついたら部屋に戻っていた。

しかし、どうやってあの場を離れたのか、どうやって戻ってきたのか、一切の記憶がなかった。

ただ、ただ、ショックだった。

望まれた婚姻のはずだった。それなのに陛下のは皇女がいた。しかも、皇女が存在を教えてくれなかった。皇女を害するとも考えら

れたのであろうか。

飛躍しているとは思うが、伝えられなかった事実が、陛下の私への信頼を表しているようで……。

けれどいつまでもここにとどまってはられない。

皇女の情報を集めなければ。皇女にお目通りができるようにしなければ。

母としての役目を一刻も早く果たさねば。

そんな思いから皇女について調べ、その母、アメリカ様について知った。

没落した家の娘を娶り、アメリカ様のことを、その家族を守ろうとするほどに、陛下は愛しておられたのであろう。

その証拠が皇女様であり、悲しみに沈んだ王宮の空気なのであろう。

私では、とても代わりを務めることなどはできない。けれどせめて陛下に亡き人への思いを貫かせることが、私にできる唯一であろう。

10（後書き）

今日はもう一回UPする予定です（心が折れなければ）。

11（前書き）

やっと書きたいところまできた。
過去編長かった。

コンコン

ドアからの控えめなノック音で現実に戻された。

「どなたですか。」

ギー

少しの音をたててドアに隙間が開いた。

その隙間から、慣れ親しんだ愛らしい姿が顔を出す。

「おかあさま、わたしです。ナーナです。おへやにはいつでもかまいませんか。」

「ええ、かまいませんよ。こちらにいらっしやい。」

侍女に目配せをし、お茶の準備をしてもらう。

「はい。」

とても元気のいいナーナ姫の声を聞き、思わず笑みがこぼれた。

「ところで姫、どういったご用件でいらしたの。」

「おかあさまにききたいことがあるんです。」

「なにかしら。」

私はナーナ姫の目を見て話す事ができるよう身をかがめた。

「おかあさまはおとうさまとケンカでもなさったのですか。」

思ってもみなかったことを聞かれ、ドキっとするが、それを出すことなく話を続けた。

「どうしてそう思うのです。」

「だって………。」

「ん。」

「だって………ちかごろおとうさまとおかあさまがいつしよいるところをみていないです………。」

聡いナーナ姫には気づきかけているようだ。そして、両親が不仲である可能性に、その幼い心を痛めているようだ。

コンコンコン

ノックの後に侍女がカートを押しながら入ってくる。

「ケンカなんてしていないわ。ちゃんと説明をするからソファアに座ってお茶を飲みながらお話しましょう。」

「………はい………。」

気落ちしているであろうナーナ姫を誘いソファアに座らせた。

カチャ、カチャ

横で侍女がお茶の準備を始めた。ポットとカップにお湯を注ぎ、陶器を暖め、その間に紅茶の分量を量っている。

そんな光景を横目に私はナーナ姫に話しかける。

「お父様とお母様はケンカなんてしていないわ。これは、約束できます。」

目を潤ませ始めたナーナ姫にはつきりと告げた。

「で……は……グス……なぜいつしよにいないんです・……?」

「それは……。」

ここで一つでも迷って告げることになってしまったらナーナ姫に不信感を持たせてしまう。

「それは……お父様のお仕事が忙しくて、お母様の空いた時間とあわないの……。心配をかけてしまつてごめんなさいね。」

「ほ……ほんとうですか……グスン。」

「ええ。本当よ。お母様はナーナ姫に嘘をつきません。」

時間が合わないのは事実でだった。

時間があうことを拒否するかのように、陛下の予定が急に忙しくなった。

それはまるで、時間があわないよう予定を組んでいるとしか思えないほどに。

カチャ、カチャ

侍女がテーブルに紅茶の入ったカップと軽くつまめるお菓子を置いた。

広がる紅茶と食べ物の匂い、とたんに気分が悪くなった。
口元にハンカチをあて、立ち上がる。

「・・・・・・・・おかあさま？」

「ちよつと・・・・失礼するわ・・・・・・・・。」

喋っている間にも気分の悪さは進んでいる。

「王妃様？大丈夫でございますか？どこか御加減が悪いのですか？」

この間まで体調を崩していた私を心配して、侍女も声をかけてきた。

「大したことはないの。ただ少しお手洗いに失礼するわ。」

ギイ、バタン

駆け込むように扉を閉め、洗面台の流しに吐いた。

「ゲホツ・・・・ゲホ。」

胃には何も入っていなかったから吐いたのは胃液だけだった。
口に広がるやな匂いと味。

ジャー

水で口の中をすすいだ。

最近、食べ物の匂いで気持ちが悪くなることが多くあった。しかし、
今のように吐いたことはなかったのだが、まだ、体調が優れないの
だろうか。

そんなことを考え、サッと血の気が引いた。

思い当たることがあるのだ。

体調不良であやふやにしていたから気づかなかった。それにもともと不調気味でもあった。

月の穢れがきていない。

．．．．．妊娠．．．．．。

思いあつたつてすぐに考えたことは、ここから逃げ出すことであつた。

11（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

亀更新で申し訳ありません。今後ともお付き合いしていただけたら幸いです。

12（前書き）

久々の更新です。

楽しんでいただけるとよいのですが……。

貴族の館にしては小さめのこの屋敷で、この国に来てはじめての安息の時間を私は手にした。

安息の時間の時間の中にも考えることはたくさんある。

ナーナ姫はさみしい想いをしていないだろうか。

陛下はどうしているだろうか。

いなくなった私のことを少しぐらい考えてくれているだろうか。

それとも邪魔ものを厄介払いできたと考えているだろうか。

考えることはすべて王都に置いてきたモノのことばかり。

けれど私には戻る資格はないのだ。

すべて自分から投げ出してきたのだから。

体調がすぐれないからと侍女をさがらせ、ナーナ姫にも部屋に帰ってもらった。

侍女達は体調がすぐれないなら侍医を呼ぶとしきりに言っていたが、自分で対処できるからと言って断った。

ナーナ姫は、ひどく心配した表情であったが『おかあさまのためなら』とおとなしく帰ってくれた。

一人になり考えるのは、腹にやどっているであろう子のこと、そればかりだった。

この子の存在を明かしていいものか。

生まれてきた子が皇女であれば何の問題もない。けれど皇女が産まれてくるといふ保証はどこにもない。

しかし、このままここにいては、黙っていてもおいおい子のこと
がわかってしまう。

……堕胎

一瞬考えて、頭を振った。

たとえ、片親であろうとも、愛情を持って生まれてくるのだということ
を伝えたい。

それに、愛するあの方との子……。堕胎なんてできるはずもなかった。

しかし、このままこの子を生かして、この子が父親愛されなかった
ら……。

愛され、望まれて生まれてきた存在じゃないと子に知れたら……。

子供にそんな運命を背負わせるなんてできない。

いきつく答えは一つ。

ここから逃げなくてわ。子のため……ううん、何より私のために。

どうやって逃げたらよいのだろう。

逃げた後の生活はどうすれば……。

……国元には帰れない。

何より私は庶民の生活がどんなものか聞いた話程度にしか知らない。
お金はどうしよう。この部屋にある宝石やドレス類など持ち出せる
小物は大層な金額で売れるであろう。しかしこれらは、民たちの血
税で買われたもの。私のためだけに使っていいものではない。

誰かに協力を頼めばいいのだろうか。しかし、ここはあの方の城、
わかってしまったら最後私に味方はいない。

どうすれば、どうすればいいのだろう。
この子を無事に産めた後なら、私はどうなっても構わない。

考えに夢中になりすぎて、部屋に人が入ってきたことに気付かなか
った。

「ひ……ま。……王妃様。」

ツビク

「さ……宰相殿。」

「脅かして申し訳ありません。ノックをしても返事がなかったもの
ですから。」

「……すみません。少し考えに夢中になりすぎていたようです。」

「いえ、そのようなところにお邪魔して申し訳ありません。ところ
で、ここに来る途中ナーナ皇女にお会いしまして、お母様の具合が
悪いようだとお聞きしたのですが。」

「大したことではありません。最近気分がすぐれなくて……。まだ、
完全に回復とはいかないようですわ。」

話している間にも徐々に気分が悪くなる。一瞬視界が真っ黒に染ま

った。

ガクッ

「王妃様！！大丈夫ですか。」

倒れた私の身体を支えてくれたのは、宰相殿であつた。

「ええ。心配をおかけして申し訳ない。」

「……………」

「宰相殿？」

「……………王妃様、最後の月の穢れはいつでしたか。」

頭の中が真っ白になった。

「王妃様、私も女です。それに子供を3人産んでいます。先ほど、気分がすぐれないとおっしゃっていましたが、微熱もあるようですね。……………妊娠……………してらっしゃいますね……………」

こんなにすぐにわかってしまうなんて……………誰にもわからないうちに逃げ出そうと思っていたのに……………。

12（後書き）

次回はいよいよ王宮逃げ出し編。
雪那はどこに逃げたのでしょうか？

13（前書き）

なんとか12時に間に合いました。

楽しんでいただけると幸いです。

宰相殿にわかっててしまったら、帝国の吉事として大々的に取り上げられてしまう。そうなつてはもう逃げられない。

「お願いします。このことは誰にも言わないで！！迷惑をかけないようにしますから……。お願いですから言わないで……。」

「……………床に座っているはお体にさわれます。どうか長椅子のほうへ……。」

宰相殿に支えられながら立ち上がり、長椅子に腰を下ろした。

「お願いします。宰相殿、いえ、オリビアさん、どうか誰にも言わないでください。」

「……………しかし、王妃様これは帝国の未来がかかった出来事なんですよ……。」

「……………いいえ、この子がどんな性別であろうと帝国を継がせる気はありません。」

「……………何を言っているんですか。あなたはこの国の王妃なのですよ。」

「出ていきます。」

「……………」

「私はよいのです。あの方に愛されなくても……………愛していたから……。でも、子供に親に愛されない悲しみを味あわせたくない。」

「……………王妃様、あなたとオルはもっと話し合う時間が必要です……………」

「いいえ、もう必要ないのです。必要とされていないのです。だって、あの方は3月も会ってくれないのです。」

「それは……………仕事が……………」

「違います。ナーナ姫にはあっているそうです。……あんなことをしてしまったから……もう私の顔など見たくないに決まっています。」

「王妃様……………」

耐えきれなくなり、私は嗚咽を吐きながら泣いた。

コンコン

急なノック音がした。声を平時戻す間もなく扉が開いた。

キィ

「……おかあさま…ナーナです。おからだはたいじょうぶですか？」

「ナーナ姫……………」

「おかあさま！……なんでないらっしゃるんですか？どこかいたいんですか？なにかやなことがあったんですか？だれかにいじめられたんですか？」

ギョッ

思わずナーナ姫を抱きしめた。

「おかあさま……………」

すごく、すごく、嬉しかった。

本当の母ではないのに、ひたむきに愛してくれることが、この子の愛があれば私はきつと頑張ることができる。

あの方に愛されなくても頑張れる。そう確信することができた。

だけど今の私には腹の中に子がいる。

ナーナ姫のためにも、この子のためにもここにいないべきではない。

それに　愛されなくても……愛しているから、あの方の愛し子に国を継いでほしい。

「どこも痛くないし、誰にもいじめられてないわ。ただ……少し悲しいことがあっただけ。でも、ナーナ姫がきてくれたから、悲しさなんてどこかに行ってしまったわ。」

「ほんとうですか？」

「ええ、ほん　」

「いいえ、王妃様はいじめられたんです。皇帝陛下に。」

私の言葉を遮って、宰相殿がナーナ姫に語りかけた。

「おとうさまが……！たえ、おとうさまであっても、おかあさまをいじめるものは、ナーナがこらしめます。」

「ナーナ姫の協力があれば、簡単にこらしめることができますよ。」

「もちろんきょうりよくします。」

あつけにとられているうちに、会話は私をおいて進んでいる。

「私は、王妃様をいじめた奴からしばらく王妃様を隠したいのですよ……。」

「おかあさまをかくすことが、おとうさまをこらしめることになるのですか？」

「ええ、効果大でしょうね。」

宰相殿がほほ笑んだ。

「うん。あ、ナーナのおしろをつかってください。」

「……お城……？」

「よろしんですか、ナーナ姫。」

「もちろんです。おかあさまをいじめるなんてゆるせません。」

「では、使わせていただきますね。」

私の疑問には誰も答えてくれぬまま、話がまとまったようだった。

「……あの……。」

「王妃様、ナーナ姫は王都からしばらく行ったところに、自身の離宮をお持ちです。管理は我が侯爵家になっていて、たとえ皇帝であろうとも、そう簡単に内情を知ることできません。」

「え……。」

「しばらく、そこに身をおかくしください。あなたにも、オルにも、距離を置いて考える時間が必要です。手配は私が行っておきます。」

その日から3日後の夜、裏門からひっそりと王宮から離れた。

13（後書き）

匿った人はナーナ姫が場所提供。知識提供は宰相のオリビアでした。

女3人集まると姦しい感じになりましたね……。

次話もがんばりますので、お付き合いよろしくお願いします。

14（前書き）

久々すぎる投稿。 みなさんお待たせしました。

君の姿を見ているだけで幸せだなんて嘘だ……。
その肌に触れ、体温を感じ、君のすべてをしゃぶりつくしてしまいたいんだ……。

だけど、恐ろしいんだ。もし、また君が泣いたら俺はどうしたらいい。

雪那のもとに通わなくなつて、3月が経つた。

この3月はとても曖昧で、何も考えたくなくて、仕事ばかりをしていた気がする。

聞いた話によれば、雪那の体調は回復し、徐々にではあるが、公務に戻ってきているらしい。

この3月、会いたくて、本当に会いたくて……夜、雪那の部屋を訪れたのは1度や2度でない。

だけど、扉が開けらなかった。

あの時の泣き顔が視界をかすめ、ドアノブに伸ばした手を止める。

また、拒絶されたら。もう、顔も見たくないと思っていたら。

そんなことばかり考えて、恐ろしくて、どうすることもできなかった。

けれど、会いたい気持ちは募つて、雪那を遠くから眺めた。

笑顔の中に悲しそうな色が見えるのは、俺に会えないせい。それと

も会いたくないから。

考えは、後退していく一方で、俺の自己嫌悪を加速させてく。

「か。……へ……か……。ちょっと、オル。」

「……すまん。ボーっとしていて聞いていなかった。オリビア、なんの話だ。」

「……発達した医療を国民にどう届けるかの話です。しっかりしていただかなくては、議会に提出できませんよ。」

「本当に申し訳なかった。街の診療所の数を増やすのはどうだろう。」

「それもいい考えではありますが、一番初めに、圧倒的に医師の数が足りていません。」

「……そうだな……医師を目指すものに補助金を出してはどうだろう。」

「予算内で可能ですかね……。」

「……議会に出す前に財務担当の大臣とも話し合わねば」

パターン

執務室の扉が勢いよく開いた。

「ノックもせず、お仕事中に申し訳ありません陛下。」

「かまわん。緊急事態なのであるう。なんだ。」

「雪那様が……王妃様の姿がどこにもありません。」

一瞬何を言われたかわからなかった。

けれど、身体は自然に動いていて、気付いたら王妃の私室の中に入っていた。

決して、侍女の報告を疑ったわけではない。自分の目で確かめなけ

れば信じられなかった。

部屋の中にはあわてた様子の侍女しかおらず、求めていた姿はそこにはなかった。

近くにいた侍女に怒鳴りつけるように状況を聞いた。

「雪那はどこにいる。いつから姿が見えないのだ。」

よほど恐ろしかったのであろう、その侍女は青い顔で答えた。

「……今朝から……お姿が見えません……。」

「なぜ、こんな時間になつて報告に来た。」

今は正午とも言つべき時間。朝から姿が見えないのならば、もっと早く報告にきていてもおかしくはない。

「……お……王妃様は、最近……誰かが起こしに来る前に、ご自身で起き、庭を少し長い時間……1時間から2時間程度、散歩なされていらつしゃいます。今日もそれだと思つておりました……。」

「ッチ。城中の者に声をかけ、王妃を探させよ。速やかに見つけ出せ。あれは、まだ病み上がりなのだぞ。」

「はい。」

侍女たちが忙しく動き出す。しばらくしたら城中が騒がしくなるであらう。

探しに行きたい衝動を抑え、情報統括の役に徹底する。こちらの方が見つかった時、すぐにでも会えるだろうから。とりあえず、執務室か私室に詰めていよう。

執務室の方がこういう事態の時向いている。しかし、なぜだか私室が気になった。

最近の仕事は忙しくしていることもあり、私室に戻らない日が多かった。昨夜もそうだ。

王の私室など限られたものしか入ることができない。

もしかしたら、雪那がいるかもしれない。そんな淡い期待も持っていた。

私室につくと、扉と床の隙間に白い何かが見えた。

拾ってみると、白い封筒だった。宛名には俺の名前が、裏返してみると雪那の印が押してあった。

急いで中を見る。

手紙には、探さないでください。さようなら。そんなことがしたためてあった。

14（後書き）

亀どころではない更新なんで、次はいつなのか……。自分でも疑問です。

そんなに遅くならずに更新したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6567m/>

刹那

2011年7月20日00時10分発行